

彼岸過迄	夏目漱石	<p>高校時代の国語の教科書に載っていた「こころ」が好きで当時漱石は何冊か読んだ。その時から漱石作品は好きだと思っていたのだけれど、今改めて読んでみてその思いに変わりがないことを確認した。何だか最近友人から漱石の話を聞いたり、大江健三郎のエッセイに「明暗」が出てきたり、新聞誌上で「行人」が取り上げられていたり、D G「人気者は誰だ」に名前が出てきたり、また読みなさいと誰かに言われてるようだったのね。</p> <p>冒頭で漱石は言います。過大評価されることなく、過小評価されることなく自分は自分らしくありたいと。なんだ好きなわけじゃん。これって今思ってることだもん。そして主人公の性格はといえば、「自我より他に何も持っていない男」「世の中と接触する度に内へとぐるを巻き込むタチ」。なんだ好きなわけじゃん。こういううっとおしい男が好みなんだもん。というわけでこの先も少し漱石作品を読みたいと思っています。</p>	☆☆☆☆
羊男のクリスマス	村上春樹 佐々木マキ	<p>クリスマスはとっくに終わったけれど季節はずれもまたいいかなと。春樹小説のレギュラー陣は、なんだ、こんなところに住んでいたのね。ここからいろんな小説に出張してくるわけか！</p> <p>絵を描いている佐々木マキさんはガロ世代にはなつかしい。</p>	☆☆☆
散歩の達人	雑誌	<p>健ちゃんから借りました。特集は「自由が丘・田園調布」だけど、小特集の「煙突は人心を惑わす」が面白い。あみちゃん流に言えばトマソン度高し、です。</p>	☆☆☆
「ガロ」編集長	長井勝一	<p>1964年月刊ガロ創刊。この頃のマンガにはなんというか、発展途上の息吹みたいなものがあった。こういうマンガ誌を創りたい、こういうマンガが描きたいという熱い思いがあった。読者もそれを真剣に受け止めていた。今のマンガはただの娯楽や暇つぶしの役目しか負って無いみたいな気がする。娯楽が悪いというんじゃないけど、それだけじゃないものが片側にきちんと存在していてほしいんだよね。小学館がビッグコミック創刊時に青林堂を編集長ごと買い取ろうとしたって話には驚いた。白土三平は手塚治虫と並ぶ一方の雄なんだね。健ちゃんから借りたんだけど、健ちゃんとはガロと同じ位付き合い長いんだな。びっくり。</p>	☆☆☆☆
ダカーポ	雑誌	<p>現代とシンクロする作家「村上龍の冒険」という特集が読みたくて買ったんだけど、たいして目新しいこともなかったな。290円にしちゃ読み応えがあるんじゃないかな。キオスクで売ってるのがうれしい。</p>	☆☆☆

<p>パパ・ユア・クレイジー</p>	<p>W・サローヤン 訳・伊丹十三</p>	<p>マリブの海辺の父の家で、10才の僕と父の新しい共同生活が始まる。父は僕に僕自身の小説を書くようにすすめる——学校嫌いの僕が父との生活の中で生きる意味を学んで行く。伊丹十三って翻訳などもやっていたのね。知らなかった。</p>	<p>☆☆☆</p>
<p>山之口貌 詩集</p>	<p>山之口貌</p>	<p>明治36年(1903)～昭和38年(1963)を生きた詩人。沖縄生まれ。貧困と窮乏の中で40年以上、詩ひとすじに生きたが、作品の数は200編位という少なさだった。一編の詩を書くのに200枚から300枚の原稿用紙を屑にして行く、推敲に推敲を重ねるといって詩作りだった。そうして出来上がった自分の詩について彼は「こうして書いた詩の中にろくな詩ひとつもないということは、もう、泣くにも泣きようがないことなのである。」と振り返る。フォークシンガー高田渡さんの「生活の柄」は彼の詩に曲をつけたものです。20才くらいで詩人をめざし上京してから、定職を得られず、夜は土管に潜って寝たり、公園や駅のベンチで寝たり、16年間畳の上で寝たことがなかったそうです。「生活の柄」はそんな生活の中で作られた詩です。</p> <p style="text-align: center;">頭をかかえる宇宙人 青みがかったまるい地球を 眼下にとおく見おろしながら 火星か月にでも住んで 宇宙を生きることになったとしてもだ いつまで経っても文なしの 胃袋付きの宇宙人なのでは いまに木戸からまた首がのぞいて 米屋なんです と来る筈なのだ すると女房がまたあわてて お米なんだがどうします と来る筈なのだ するとぼくはまたぼくなので どうしますもなにも 配給じゃないか と出る筈なのだ すると女房がまた角を出し 配給じゃないかもなにもあるものか いつまで経っても意気地なしの 文なしじゃないか と来る筈なのだ そこでぼくがついまた かっとなって女房をにらんだとしてもだ 地球の上での繰り返しの 月の上にいたって 頭をかかえるしかない筈なのだ</p>	<p>☆☆☆☆☆ こんなふう に素直に心 に入ってくる 詩と出会うと、 詩集は読みにくい ものと思っ ていたこと なんて、ただ の思い込み だったんだ など実感し ます。</p>
<p>香港 頭上観察</p>	<p>赤瀬川原平</p>	<p>香港ではビルというビルが容赦なく上へ伸び可能な限り背伸びをしているようで、路上観察者である作者もつい頭上をみてばかりいるそうだ。隙間なんかない位に埋まった建物の写真は私のカメラマン？心もくすぐる。行ってみたいなあ香港。</p>	<p>☆☆☆</p>
<p>HOW TO</p>	<p>村上一昭</p>	<p>—楽しいミニチュアランドへの招待—</p>	<p>☆☆☆</p>

ドールハウス		16分の1に縮小された世界は不思議な魅力に満ちている。可愛いちょっとレトロな西洋風の家や家具は、小さい頃に果たされなかった夢を今再現してみせてくれているのだろうか？見ているだけでも楽しいけれど、寸法付きの型紙が載っているので実際につくってみるのもよいよね。	
すてきにドールハウス	工藤和代	こちらの作品の方が村上一昭さんのものより、よりロマンチックかな？衣料品のお店やパン屋さん、ランジェリーショップまであって楽しい。我が家ではジェニーちゃんのお家を少しずつ作っています。いまのところ、ベッド(もちろん布団に枕付き)、椅子、テーブル、最新作は食器棚。次にはピアノかイーゼルを作ろうと思ってるんだけど。いつかDGに写真入りで紹介させてもらうかも。その時はよろしく。	☆☆☆.
もう消費すら快樂じゃない彼女へ	田口ランディ	朝日、読売新聞の書評で続けて読んで興味を惹かれ、図書館で予約して借りました。 ＜世の中を騒がせた様々な事件、社会現象を通じてあやうく微妙なバランスの中で成り立つ刹那の時代のリアルストーリー＞神戸の事件などの大きな事件より片隅で起こるすぐに人々から忘れ去られていくような事件への筆者のこだわりがいい。世の中にはこんなに生きていくことが大変な人たちがたくさんいるんだなあ。しみじみ。	☆☆☆☆
装丁家103人の仕事 BOOK DESIGN 1998	日本図書 設計家協会	装丁家が自薦した作品・約1000点が収録されている。見やすい一人一ページ構成で、それぞれに個人データが紹介されている。全カラー。雑誌の表紙など絵柄はよく知っていても装丁家の名前なんて全く知らなかった。DGの表紙作りの参考になればと思って読んでみました。成果は出るかな？	☆☆☆
FULL MOON	写真集	＜アポロ宇宙飛行士の目撃した究極の光景は、まだ誰も見ていなかった。NASAが公開に踏み切った決定版写真集＞1999年発行。 鼻かぜをひいた船長や疲れて埃まみれの乗組員、月面に置いた家族写真をおさめたスナップもある。壮大で荒涼とした月面に人間臭さが加わったような写真が好きだ。それにしても地球という星はなんてきれいなんだろう。こんな情景を一目でも見たら人生観がかわっちゃうのなんて当たり前だよ、きっと。	☆☆☆
BY NATU RE 'S DESIGN 大自然のかたち	著パット・ マーフィー 写真 ウィリアム・ ニール	螺旋とつるまき・蛇行とさざ波・球体と炸裂・枝分かれ・収容とひび割れ——命や自然はあるパターンを持っている。映画「イングリッシュペイシエント」の砂漠の風紋はとても美しかった。横尾忠則の絵の中にはいくつもの螺旋が潜んでいたっけ。	☆☆☆
永順	高橋永順	奇麗で可愛い花の写真と花にまつわるエッセイ。	☆☆☆

「花」日記		文章を読ませてもらって想像するyukoさんのイメージと重なります。お花を趣味にしている人へのプレゼントには絶好ですね。永順さんがご主人を「省ちゃん」と呼ぶと、yukoさんは「省吾さん」のことを思いだすんじゃないかな、なんて勝手に想像して楽しませてもらいました。	
清掃工場・リサイクル関連施設	建築資料研究社	東京23区を中心に清掃工場の概要や景観デザインを紹介しています。大阪に新しく出来た工場はまるで遊園地のように、煙突までもちょっと可愛い。前に触れた「散歩の達人」の特集「煙突は人心を惑わす」という言葉通り、清掃工場の煙突もまた颯爽としていて惹きつけられます。たかが煙突、されど煙突ってなわけで目黒の清掃工場へお花見に行つてこよ〜つと。	☆☆☆
本づくり大全 文字・レイアウト・造本・紙	新デザインガイド	吉田戦車「伝染るんです。」の本づくりのコンセプトは「壊れ本」。ことごとく不器用な人に作られてしまったという設定で裁断ミス、印刷ミスは当たり前、返本が後を断たなかったそう。こんな企画を許可する出版社も豪快だ。巻末に「自分で本を綴じてみる」ということで和綴じのやり方が載っている。付録に豆本キットが付いてるのが楽しい。	☆☆☆
わたしのパッチワークキルト	松浦香苗	コタツ&ベッド編。ベッドカバーのような大作を作るには膨大な時間がかかるんだろうな。好きじゃなきゃとつても出来ない仕事だと思います。松浦香苗さんの作品は藍木綿を使った和風のものなど落ち着いた色調でとても魅力的なんだけど、私みたいに運針もまっすぐ出来ない不器用な人にはとつても無理でしょう。本を見てるだけだなぁ…。	☆☆☆

今月は小説は夏目漱石一冊だけです。ついつい漫画ばかり読んでしまうんですね。最近も息子の本棚から拝借してきた『バガボンド』（井上雄彦 作。アニメにもなった『スラムダンク』が有名です。）を読んだんですけど、これって面白い！今の若い人描くところの漫画は絵的に言えば描き込み過ぎて読みにくく、ストーリーは妙に破滅的についていけないと思ひ込んでたけど、そんなことないのね。吉川英治の『宮本武蔵』が原作ということもあってかストーリーがしっかりしていて説得力がある。迫力のある絵柄もお話と似合ってます。ただいま9巻まで出ているけど一気に読めます。宝蔵院流槍術二代目胤舜との対決は読み応え十分！ちかちゃんに面白いとすすめたら、たしかがみちゃんもそう言っていたって。今度『バガボンド』談義いたしましょう。『バガボンド』とは浮浪者、放浪者の意味だそーで。バカボンのパパとは何の関係もないみたい！

